「難民 世界に1億人超」

四日市 UNHCR職員が講演

多文化共生のまちづくりを考える講演会が16日、四日市市文化会館であり、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所法務部の宮沢哲・首席法務アソシエイトが「難民問題に関心を持ってもらい、支援について知ってもらうことが第一歩」と呼びかけた。

宮沢さんは冒頭、国籍や宗教、人種などを理由に迫害を受ける恐れがあるとして国外に避難している難民が、2023年時点で世界に1億1730万人いることを説明。UNHCRは「国連の中の難民を担当する専門機関」と表現し、「最低限の」現金給付や住居提供などの支援をしていることを紹介した。

自身の経験を交えながら、難民の状況などについて講演する宮沢さん＝四日市市文化会館で

23年に、難民申請などを通して日本に保護を求めた人が約3万7千人いることも伝え、「今後はより溶け込めるように定住のための支援が一層大事になる」と強調。「交流イベントや寄付に参加してみてくれれば幸い」と締めくくった。

講演会は同市から委託を受け、外国人の住居支援や市役所での通訳業務などを行うNPO法人「ハートピア三重」が主催。講演会後には、県内在住のアーティストによるアンデス音楽の演奏もあった。

（軍司歩人）

波の詩（うた）

アイゴ

海藻を過剰に食べ、海産物の収量に影響を及ぼす「磯焼け」。伊勢湾では、黒潮大蛇行や海水温上昇で海藻を食べる植食性魚類「アイゴ」などが活発になり、イセエビや海藻を餌にするアワビ、サザエの生息を脅かしている。

海女漁が盛んな鳥羽市相差町の弘道小学校で13日、鳥羽磯部漁協戦略企画室長の小野里伸さん(56)が教壇に立った。伊勢湾の藻場の現状や磯焼け対策につながるアイゴの調理方法を伝えると、児童から質問が飛び交った。

授業後は、アイゴを使った給食が提供された。小野里さんは児童に「アイゴはおいしい魚だと大人に教えてあげて」と呼びかけた。

6年の家田一歩（いっぽ）さんは「やわらかくて、おいしかった。家でも竜田揚げやあんかけにして食べる」と話す。子どもたちの前向きな姿勢は、地域の海の明るい未来につながるはずだ。

（北村太一）

添乗員の仕事について説明する小田さん(左)＝伊勢市の皇学館中で

を深めた。

伊勢商工会議所の会員を中心に有志でつくる実行委員会が主催。働くことについて考えてもらおうと2012年度から、市内各地の学校で開いている。

今回は税理士や薬剤師ら8人を講師に招いた。キャリア教育の一環として参加した生徒たちは興味のある講師を選び、それぞれの働き方に聴き入った。

元旅行会社添乗員の小田薬剤師の仕事についてんだ松井春陽さんは「調以外にも仕事をしている知らなかったので驚いた薬剤師になりたい気持ち強まった」と語った。

（大見亜蘭）

パウル・クレー展

創造をめぐる星座

「パウル・クレー展 創造をめぐる星座」（中日新聞社など主催）が3月16日まで、愛知県美術館で開かれている。3人の著名人に、本展の魅力について語っていただいた。

◇

パウル・クレーとの出会いのきっかけは高校生の頃、青騎士やバウハウスの文脈だったと思います。小中学の時に行った美術館に所蔵されていたので、作品自体はその前に触れていたようです。クレーの作品は視覚的には、色合いが独特という印象でした。一見幻想的に見えて、実は生々しい。人物としては、クレーを尊敬していると公言するアーティストが今も昔も多いので、artistという印象です。

クレーの作品はとにかく幅が広く、音を絵画で表現した色彩豊かなものがあれば、プリミティブなドローイングなど。点描など、シンプルに見える作品もよく見たらとても凝っていて、飽きないです。作品そのものもですが、哲学が面白い芸術家です。

アレクサンダー・エリアスベルク撮影 ミュンヘンのパウル・クレー 1911年

幻想的に見えて生々しい

(上) 市川紗椰さん＝モデル

豚枝肉市況
（20日・四日市食肉市場＝キロ・円）

	高値	安値	平均
極上	—	—	—
上物	619	540	588
中物	586	497	522
並物	532	464	488
等外	—	—	—

▽反落